

G-1 現代日本語形容詞の多義区分に対する言語学的テストの有効性 －語彙・文法・論理テストから－

西内沙恵 筑波大学大学院
sae.takesivna[at]gmail.com

要旨

現代日本語形容詞の多義について、これまで身体性の関わりや拡張のプロセスが明らかにされてきた。しかし、多義を区分する手法の有効性については、未だ統一的な見解に至っていない。語が複数の意味を持つことを実証する方法には、言語学的テストと心理実験が考案されている。本研究では、形容詞の多様な意味に対して言語学的テストである語彙・文法・論理テストがどのように作用するか、その有効性を比較検討する。数多くの言語学的テストのうち、形容詞の多義区分に適用しやすい、反義語の異なり（国広 1982）・用法上の制約（靛山 1995）・分離テスト（松本 2010）を取りあげる。各テストで多義がどのように区分できるか、『明鏡国語辞典第2版』で形容詞と否定形の連語に分類される語から複合語と文章語を除いた290語を対象に調べた。テストの結果、感情・感覚・評価と属性への読み替えを経た意味の区分には文法テストが、属性への読み替えを経た意味と属性への読み替えではない拡張義の区分には拡張のプロセスに応じた語彙・文法・論理テストの使い分けが有効だとわかった。

1. 本研究の背景と目的

本研究は、形容詞の多義を区分する言語学的テストの有効性を検証する。多義語とは、「同一の音形に意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語」（国広 1982: 97）である。形容詞の多義について、その記述とモデル構築には研究の蓄積があり、仲本（2006）や大石（2007）などで観察者と対象との相互作用や、拡張のメカニズムが明らかにされている。また、篠原（2008）では、指示対象がずれるメトニミー現象が、属性への読み替えという点で形容詞使用の基盤にも作用していることが論じられている。形容詞の意味使用にメトニミー拡張が大きく関与していることには疑いがなく、メトニミーによる属性への読み替えだけでは、形容詞の多様な意味拡張を説明するのに不十分である。篠原（2008, 2019）には次の問題点があげられる。まず、事例の多くが感情形容詞と感覚形容詞であり、形容詞タイプに偏りがある。次に、(1)のような属性形容詞の例をあげ、対象へのピント調整が柔軟だと述べているが、(1)は名詞にメトニミーが働いている例であり、名詞と形容詞が混同して論じられている。さらに、(2c)のような拡張義が扱われていない。(2c)の意味は、<温度が低い>と違い、(2d)のように経験者を主語に表すことができない点で、(2ab)とは異なっている。容認される場合は、対比の読みであり、主語の属性や状態が<つまらない>わけではない。

- (1) 秋田よかったよね（秋田でめぐった名所 / 秋田での出来事 / 秋田で出会った人 / 秋田での家族との会話 / 秋田の食べ物や温泉）（篠原 2019: 63）
- (2) a. 私は寒い。<温度が低い> b. 風が寒い。<温度が低い>
c. ギャグが寒い。<つまらない> d. 私は寒い。<*つまらない>

(2c)のような意味拡張は、「寒い」に限らず、多くの形容詞に見られる。本研究では、文脈に左右されない、形容詞の語彙意味における多義の認定を目指し、従来考案されてきた言語学的テストを用いてどのように区分できるかを検討する。これまで、多義の実証的な区分のために、言語学的テストと心理実験が多角的に編まれてきた。言語学的テストには、語彙・文法・論理の観点から(3)から(5)のような手法が考案されている。

- (3)a. 高い木 ↔ 低い木 <空間> b. 高い本 ↔ 安い本 <価値>（反義語の異なり）
- (4)a. 花子は髪をミジカク切った。<空間> b. ×私はテレビをミジカク見た。<時間>（用法上の制約）
- (5)彼は娘に甘い<厳しくない>。といっても、食べ物じゃないから、本当に甘い<糖度が高い>わけじゃない。（分離テスト）

感情・感覚形容詞から属性に読み替えられた意味ではない形容詞の多義も射程に収めるにあたって、手法の明確化を試みる。

2. 多義を区分する言語学的テスト

多義を分析するにあたり、同音異義ではないことを確認する必要がある。多義と同音異義は、歴史的な意味の推移ではなく、意味間の関連性を感じ取れるかという話者の直観によって区分される。国広（1982）は、多義と同音異義が本質的に連続した現象であり、明確な境界を定めることができないと考えるべきだとしている。多義と判断するには、話者の直観という中心的な基準に加え、形式類が同じであること、意味が転用関係にあることも基準となる。本研究では、形容詞という形式類が同一であることと、多義間の関連性を基準に多義語だと判断する。次に、語彙・文法・論理の観点から提案されてきた言語学的テストを列挙し、形容詞の多義区分に適用しやすい手法を選別する。

2.1 語彙テスト

多義区分を言語事実から確認する言語学的テストに、まず、関連語によって多義を認める語彙テストを取りあげる（6）。語彙テストは、多義がそれぞれ異なる意味分野に属していることを利用し、各意味分野を取り巻く関連語を手がかりに区分する方法である。

- (6)a. 上下関係 (hyponymy) をなす語の体系の中で、異なったレベルに位置する。（国広 1982）
b. 異なる反義語が存在する。（国広 1982）
c. 異なる反対語が存在する。（靱山 1993）
d. 異なる類義語が存在する。（靱山 1993）
e. 異なる上位語が存在する。（靱山 1993）

(6a) (6c) (6e) は、該当する性質を備えることが多い名詞と動詞に適用しやすいテストである。

(6b) (6d) は、形容詞に連続的反義と両極的反義の関係にある語が多いことから、適用しやすい。反義語の異なりは、分析対象とする語と反義関係にある語も分析対象と同じ拡張プロセスを経ている場合に有効に働かないという欠点がある。例えば、「明るい」は、物理的な程度と抽象的な様子という異なる意味分野に属する多義と考えられるが、(7)のように反義語の異なりからは区分できない。

- (7)a. 明るい部屋 ←→ 暗い部屋 <明度の程度>
b. 明るい性格 ←→ 暗い性格 <性格の様子>

対して、類義語は、類義関係が多岐にわたるために意味区分が際限なく設けられてしまうという欠点がある。(8a) (9a) は、<温度が低い>という意味では共通しているが、類義語間では快不快の違いがある。(8b) (9b) も、<思いやがない>という様子では共通しているが、悪質さの度合いが異なっている。いずれも、ある一定の意味が文脈の相違から具体的に別の意味に見える文脈的変容の差異と考えられるが、類義語の異なりという基準では、別義の判断材料になりうる。

- (8)a. ツメタイ風に当たった。[類義語：ひんやりとした]
b. Aさんは急にツメタイ態度をとった。[類義語：冷淡な]（靱山 1993: 50 []は筆者による。）
(9)a. 冷たい北風に身を縮ませた。[類義語：凍えそうな]
b. Aさんは冷たい仕打ちを受けた。[類義語：邪険な]

本研究では、語彙意味における多義を認定するという目的から、文脈の影響を大幅に受けない反義語の異なりを語彙テストの代表に選び、5節で有効性を検証する。

3.2 文法テスト

次に、文法テストを取りあげる（10）。文法テストは、多義がそれぞれ異なる文法用法を有していることを利用し、容認性判断の違いによって別義を認定する方法である。

- (10) a. 形態的な相違がある。（国広 1982）
b. 用法上の制約がない/少ない。（靱山 1995）
c. 格体制が異なる。（靱山 2012）
d. 共起する副詞が異なる。（高橋 2016, 有菌 2019）

用法上の制約とは、例えば、「近い」の<時間>には(12b)のように名詞化「近く」に格助詞が後続する用法に制約がある(靱山 1995)。なお、同論文は、プロトタイプの意味の認定方法を検証するものだが、「プロトタイプの意味を認定するということは、多義的別義間の関係を捉えることに直結する」(靱山 1995: 623)と述べているように多義区分にも援用できる。また、用法上の制約は、名詞化に限らず、分析対象とする語の特性に応じて副詞化の用法制約(4)など臨機応変に運用される。

- (11) a. A 大学は駅からチカイ。<空間>
b. 平和が訪れる日もチカイ。<時間>
- (12) a. 車が角を廻るまで、下りた近くに立って見送ってくれる。<空間>
b. *チカクにオリンピックが開催される。<時間> (靱山 1995: 631 (12a)は一部の抜粋である。)

形態的相違は、日本語形容詞に適用しにくい。格体制と共起する副詞の異なりは、形容詞にも適用可能だと考えられるが、ここでは用法上の制約を文法テストの代表とし、その有効性を検証する。

3.3 論理テスト

最後に、文中で語を二つの意味で使用することで多義を認める論理テストを取りあげる(13)。

- (13) a. 分離/統合テストを利用する。(松本 2010)
b. 修辞技法であるくびき語法・兼用法を利用する。

分離テストは、(14a)のように一つの語を異なる意味で用いたとき真偽が独立することを利用する。統合テストは、(14b)のように一つの語が同時に異なる意味を担えないことを利用し、文の容認不可を確かめる。分離/統合テストを比べると、(15)のように分離テストならく手で捉える>とく[目的語内容を]理解する>に区分される意味も、統合テストでは一つの大きな意味グループに統合される。

- (14) a. 太郎は起きて(=目覚めて)いたけど、(横になっていて)起きて(=身を起こして)はいなかった。
b. *太郎は、次郎の頬と次の対策を打った。(松本 2010: 25-26)
- (15) a. この記事の趣旨は何かつかめた。もっとも、物じゃないから、本当につかんだわけじゃない。
b. この記事の趣旨は、沼のウナギと同じくらい、つかみにくい。(松本 2010: 27)

くびき語法は、(16a)のようにカテゴリーが異なる複数の語を無理に一つの述語で受ける言語操作で矛盾感を引き起こし、特殊な効果をねらう修辞技法である(中村 1991)。状況にあった意味の二重性を作り出すプロセスから、多義が認められる。兼用法は、(16b)のように一つの形式に文字通りの意味と隠喩の意味、二つの意味を前景化させており、多義を利用している(小松原 2016)。

- (16) a. 車や飛行機の飛ぶ便利な世の中になった。(中村 1991: 357 下線は筆者による)
b. その顔が石鱈と摂津大掾を聞こうという希望との二つで、有形無形の両方面から輝いて見える。(夏目漱石『吾輩は猫である』 下線は筆者による)

修辞技法は、「スピーチとスカートは短いほうがいい」のような有名な乾杯の音頭もある一方で、作例も修辞技法による効果の評価も難しく、運用しにくい。本研究では、分離/統合テストのうち、物理的な内容と抽象的な内容を区分できる分離テストを論理テストの代表に援用する。

以上、形容詞に対するテストの適用可能性を検討し、語彙テストに反義語の異なり(国広 1982)・文法テストに用法上の制約(靱山 1995)・論理テストに分離テスト(松本 2010)を用いることとした。

4. 本研究の分析対象

言語学的テストの有効性を検証するにあたり、次の方法で分析対象を得た。『明鏡国語辞典第2版』から形容詞と、否定形の連語に分類される語を抽出し、ここから複合語と文章語が単義になりやすいため除いて、得られた290語を対象とした。なお、ク活用・シク活用形容詞を含まない。また、形容詞には、「いい」「よい」など異なる見出しの同じ語を13語含むほか、くだけた言い方と記載のある「あったかい」、卑俗な言い方と記載のある「こまい」「でっかい」も対象に含めている。

分析に先立ち、対象とする290語を、村上(2017)で提案される様態ソウダの指標により感情を志向する4段階に分類した。感情形容詞のA群・B群と属性形容詞C群・D群である。感情形容詞のうち、A群は経験者の感情を表すことを志向し、B群は感情の対象となる事物の状態を表すことを志向する。属性形容詞のうち、D群は典型的な属性形容詞であり客観的な評価を表し、C群は属性形容詞でありながら副詞句で感情形容詞のように振る舞う。村上(2017)は、人称制限を利用し、終止用法・副詞用法・連体用法においてソウダが心の様子を表す場合(内部ソウダ)と外側の様子を表す場合(外部ソウダ)に応じた分類を考案している(表1)。内部ソウダの解釈は、「[形容詞]と感じているように見える」のように思考動詞が入れられるかどうかで判断する。表1の指標1において、「忙しい」など「[形容詞]と感じているように見える」内部ソウダの解釈も「[形容詞]ように見える」外部ソウダの解釈も可能な場合には、内部ソウダの解釈ができることを重視し、○と判定する。なお、C群では、対比的な文脈であれば内部ソウダの解釈が可能だが、これは内部ソウダ解釈に含まない。指標3では、感情形容詞が連体用法で経験者を被修飾名詞にとり、対象をとらないことを利用し、内部ソウダの解釈にしなければならない場合に、経験者の感情を表すことを志向するA群に分類する。

表1 様態ソウダによる形容詞分類(村上2017:67の図を参考に、説明と例文を追記)

分類	指標	指標1	指標2	指標3
		終止用法で[内部ソウダ]になる	副詞用法で[内部ソウダ]になる	連体用法で[内部ソウダ]にしなければならない
A	「悲しい」など、経験者の感情を表すことを志向	○花子は、 <u>悲</u> そうだ。(〔花子は悲しいと感じている〕ように見える。)	○花子は、 <u>悲</u> そうにうつつむいた。(〔花子が悲しいと感じているように見えるやり方で〕うつつむいた。)	○悲しそうな様子・*悲しそうな話
B	「寒い」など、経験者の感情だけでなく対象の状態を表すことも志向	○花子は、 <u>寒</u> そうだ。(〔花子は、寒いと感じている〕ように見える。)	○花子は、 <u>寒</u> そうにこちらを見た。(〔花子は、寒いと感じているように見えるやり方で〕こちらを見た。)	×寒そうな様子・寒そうな部屋
C	「うるさい」など、属性形容詞だが副詞句で感情を表す	×花子は、 <u>うる</u> さそうだ。(〔 花子は、うるさいと感じている 〕ように見える。/[花子は、大声で話す迷惑な人間である]〕ように見える。)	○花子は、 <u>うる</u> さそうに耳をふさいだ。(花子は〔花子がうるさいと感じているように見えるやり方で〕耳をふさいだ。/ 花子は〔花子が大声で話す迷惑な人間であるように見えるやり方で〕耳をふさいだ。)	
D	「明るい」など、典型的な属性形容詞	×花子は、 <u>明</u> るそうだ。(〔 花子は明るいと感じている 〕ように見える。/[花子は明るい人間である]〕ように見える。)	×?花子は、 <u>明</u> るそうにあいさつした。 cf. 花子は、明るくあいさつした。	

村上(2017)は、国際交流基金『日本語能力試験出題基準』(2002)の旧日本語能力試験1級の語彙表に含まれる形容(動)詞638語(うち形容詞221語)を以上の指標で分類している。このうち、形容詞「うまい<おいしいC/上手なD>」、「おかしい<こっけいなB/変なD>」、「かわいい<愛しいA/外見がいいD>」には、別分類にまたがる二義認めている。本研究では、これら3語を感情を志向する意味を基準にA群、B群、C群に分類し、D群の意味を多義として扱う。対象とする290語は、A群33語、B群39語、C群22語、D群196語に分類された。次節で、飛田・浅田(1991)に記述される意味を参考に、言語学的テストでどのように区分されるかを検証する。

5. 多義を区分する言語学的テストの有効性検証

感情を志向する4段階の形容詞タイプ、それぞれに属する形容詞に語彙・文法・論理テストを行ったところ、属性への読み替えを経た意味と属性への読み替えではない拡張義とで異なる傾向が得られた。属性への読み替えとは、対象が経験者にとってどのようなあり方をしているかという主観的な評価が対象に本来備わっている属性に読み替えられるメトニミー現象である(篠原2008)。西尾(1972)にも、感情形容詞と感覚形容詞の多くが属性を表す用法をあわせ持つことが記述されている。メトニミーとは、近接性に基づく比喩であり、言語表現と実際の意味内容がずれる現象である。これらは、(17)(18)のように経験者を描写するかどうかで異なっている。対して、属性への読み替えではない拡張義は、(2)のように感情・感覚から属性、(19)のように属性間で比喩的に拡張した、字義通りではないが、関連する意味である。

- (17) a. 私は悲しい。(感情の主体) b. 父の死は悲しい。(感情の機縁)
- (18) a. 私は痛い。(感覚の主体) b. バラのトゲは痛い。(感覚の機縁)
- (19) a. 唐辛子はからい。(対象の属性) b. 評価はからい。(対象の属性)

5.1 感情・感覚・評価と、属性への読み替えを経た意味

(20) から (22) は、A 群から C 群の感情・感覚・評価と属性への読み替えを経た意味を反義語の異なりによって区分しようとした例である。いずれも、反義関係にある語が同様に読み替えられ、テストとして作用しない。

- (20) a. 嬉しそうな顔 ↔ 悲しそうな顔 b. 嬉しいニュース ↔ 悲しいニュース × (A 群)
 (21) a. 私は忙しい ↔ 私は暇だ b. 忙しい仕事 ↔ 暇な仕事 × (B 群)
 (22) a. おいしそうに食べた ↔ まずそうに食べた b. おいしいケーキ ↔ まずいケーキ × (C 群)

ただし、(23) から (25) のように感覚・評価から人間の性格に読み替られた場合は作用する。

- (23) a. 私は恐ろしい ↔ 私は平気だ b. 恐ろしい先生 ↔ やさしい先生 ○ (B 群)
 (24) a. うるさそうに聞いた ↔ 穏やかに聞いた b. うるさい客 ↔ 静かな客 ○ (C 群)
 (25) a. うざそうな顔 ↔ 嬉しそうな顔 b. うざい先生 ↔ いい先生 ○ (C 群)

A 群から C 群の感情・感覚・評価と属性への読み替えを経た意味を区分するには、文法テストが有効であった。(26) から (28) は、「ものだ」付加による一般性解釈を利用し、用法上の制約を認める例である。感情・感覚・評価では、「ものだ」付加が不可能だが、読み替えを経た属性では可能である。意味の恒常性の違いから、用法上の制約が適用できると考えられる。

- (26) a. *私は帰省が嬉しいものだ。 <感情> b. 帰省は嬉しいものだ。 <属性> (A 群)
 (27) a. *私は仕事が忙しいものだ。 <感覚> b. 仕事は忙しいものだ。 <属性> (B 群)
 (28) a. *私は桃がおいしいものだ。 <評価> b. 桃はおいしいものだ。 <属性> (C 群)

(29) から (31) は、A 群から C 群の感情・感覚・評価と属性への読み替えを経た意味を分離テストによって区分しようとした例である。B 群と C 群は、一度属性として付与した感覚や評価を覆しにくく、作用しにくい。対して、A 群は、感情という変化しやすい性質から、属性であっても上書きをしやすく、B 群と C 群に比べると適用しやすい。しかし、容認性判断に個人差があった。

- (29) ?負けるのは悔しい<属性>が、できる努力はしてきたので、本当に悔しい<感情>わけじゃない。(A 群)
 (30) ??冷蔵庫は重い<属性>が、持ち方のコツを知っているので、本当に重い<感覚>わけじゃない。(B 群)
 (31) ??ほうじ茶は香ばしい<属性>が、今風邪気味なので、本当に香ばしく<評価>感じているわけじゃない。(C 群)

以上の結果を表 2 にまとめる。反義語の異なりも分離テストも、メトニミーによる属性への読み替えを区分しにくかった。篠原 (2008) が指摘するようにメトニミーが形容詞の基本的な拡張パターンであり、反義関係にある形容詞も同じ拡張を経ているためと考えられる。ただし、人間の性格は、変化しにくい特性から、典型的に属性を表す D 類が受け持っており、メトニミー拡張でも反義語の異なりが作用しやすい。

表 2 感情・感覚・評価と、属性への読み替えを経た意味を区分する言語学的テストの有効性

テスト	感情・感覚・評価と、属性への読み替えを経た意味		
	語彙テスト	文法テスト	論理テスト
形容詞			
感情(A 群)	×	○	△
感覚(B 群)	△	○	×
評価(C 群)	△	○	×
情態(D 群)			

※×：作用しない。△：作用する場合もある。○：有効に作用する。

5.2 属性と、属性への読み替えではない拡張義

属性と、属性への読み替えではない拡張義を区分するには、形容詞タイプに応じてではなく、拡張のプロセスに対応した有効範囲の語彙・文法・論理テストを使い分けるのが有効である。前節でもその傾向が見られたように言語学的テストは拡張のタイプによって区分できる範囲が異なっている。

反義語の異なりでは、(20) から (25) のように人間の性格を除くメトニミーに有効に働かなかつた。対して、メタファーによる拡張義には、有効に作用する。メタファーは、類似性に基づき、ある

共通性が別の領域に写像される現象で、多義が生み出されるメカニズムでもある、(32)から(35)は、A群からC群の属性への読み替えを経た意味およびD群の属性と、それらの属性への読み替えではない拡張義を反義語の異なりによって区分する例である。

- (32) a. かわいいアヒル←→醜いアヒル b. かわいいサイズ←→大きめのサイズ ○ (A群)
 (33) a. 寒い部屋←→暑い部屋 b. 寒いギャグ←→面白いギャグ ○ (B群)
 (34) a. 渋い柿←→甘い柿 b. 渋い色←→華やかな色 c. 渋い支払い←→気前のいい支払い ○ (C群)
 (35) a. 薄い本←→厚い本 b. 薄い味付け←→濃い味付け c. 薄い印象←→強い印象 ○ (D群)

メタファーによく作用することは、(36)のようにD群の属性の多義でもメトニミー拡張には機能しないことからわかる。(36b)は、物理的に明度を受けた色彩へのメトニミー拡張である。

- (36) a. 鋭いナイフ←→鈍いナイフ b. 鋭い痛み←→鈍い痛み× c. 鋭い指摘←→的外れな指摘 ○ (D群)

対して、メタファーであっても、人間の性格には(37)のように適応できない。(23)から(25)の例と対称をなしており、人間の性格を表す語彙がD群に充実しているためと考えられる。

- (37) a. 明るいライト←→暗いライト b. 明るい性格←→暗い性格 × (D群)

この適用制限は、人間に対する描写でも「*まだ明るい性格」のように変化が想定できない場合に限られる。(38)は、「まだ青い考え」のように変化が想定される点で厳密な人間の性格ではなく、反義語の異なりで区分できる。

- (38) a. 青い顔←→赤い/血色のいい顔 b. 青い考え←→成熟した考え ○ (D群)

次に、文法テストでどのように区分されるかを見ていく。副詞化の用法制約は、メタファーに概ね作用する。なお、形容詞で二次述部を作例するにあたって、状態記述二次述部は形容詞で成立しない(竹沢 2001)ため、結果二次述部で作例した。C群とD群の一部の拡張義には(41b) (42b)のように作用しなかった。「もう着こなしが渋い」「まだ味付けが薄い」のように局面的な解釈(仲本 2007)が可能であり、この点で(41c) (42c)と異なる。

- (39) a. かわいく笑った<愛らしい> b. かわいく作った。<??小ぶりだ> (A群)
 (40) a. 部屋を寒く冷やした。 b. *ギャグを寒く作った。 (B群)
 (41) a. 山菜を渋く煮付けた。 b. コートを渋く着こなした。 c. *会社は給料を渋く支払った。 (C群)
 (42) a. 本を薄く作った。 b. スープを薄く味付けした。 c. *彼女を薄く覚えている。 (D群)

最後に、(44)から(46)のように分離テストもメタファーに概ね作用することがわかった。ただし、害虫に対して<小ぶりだ>という意味でも「かわいい」を使用せず、<愛らしい>という意味と密接に関係している拡張義には(43)のように作用しなかった。

- (43) *シンガプーラはかわいい<小ぶりだ>といっても、目がギョロギョロしていて本当にかわいい<愛らしい>わけじゃない。 (A群)
 (44) 彼のギャグは寒い<つまらない>。といっても、場所じゃないから本当に寒い<気温が低い>わけじゃない。 (B群)
 (45) a. このコートは渋い<落ち着いている>。といっても、食べ物じゃないから本当に渋い<舌がしびれる>わけじゃない。
 b. この会社は金払いが渋い<出し惜しみする>。といっても、食べ物じゃないから本当に渋い<舌がしびれる>わけじゃない。 (C群)
 (46) a. この店の味付けは薄い<濃度が低い>。といっても本じゃないから本当に薄い<厚みがない>わけじゃない。
 b. 彼女の印象は薄い<程度が小さい>。といっても本じゃないから本当に薄い<厚みがない>わけじゃない。 (D群)

以上の結果から、属性と読み替えではない拡張義を区分するには、拡張のプロセスに有効な語彙・文法・論理テストを使い分けるのが有効である。5.1 節と 5.2 節の分析を (47) にまとめる。

- (47) a. 反義語の異なりは、メタファー拡張した意味に有効である。ただし、D 群に人間の性格にかかわる語彙が充実しており、人間の性格へのメタファー拡張には作用しない。
b. 用法上の制約は、メトニミー拡張した意味にもメタファー拡張した意味にも概ね作用したが、メタファーであっても局面解釈に差異がない場合には作用しない。
c. 分離テストは、メタファー拡張した意味に概ね作用したが、多義間がスキーマティックな関係にある場合に作用しにくかった。

6. おわりに

形容詞の多様な多義を分析するために、まず多義を区分する言語学的テストの有効性を検証した。メトニミーである属性への読み替えに対しては、文法テストが作用した。メトニミーが形容詞に基本的な拡張パターンであり、多くの語で同様に拡張しているためだと考えられる。メタファー拡張には、いずれのテストも適用できたが、反義語の異なりでは人間の性格を表す D 類に、用法上の制約では局面解釈が可能な場合に、分離テストではスキーマティックな意味関係に作用しにくかった。

早瀬 (2018) が指摘するように分析対象の意味そのものが柔軟であるために、言語学的テストでは適用範囲が限定されたり機能が剛柔であったりと、ただ一つのテストでは妥当性が懸念されることが多い。手法の適用範囲が明らかになることで、多義に対して直観に沿いながらも、言語事実に則った妥当な説明が目指される。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 18H05521, 19K00591 の助成を受けたものです。

参考文献

- 有菌智美 (2019) 「多義動詞の語義認定における付加詞要素の役割」『日本認知言語学会発表論文集』19: 525-530.
大石亨 (2007) 「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」『日本認知言語学会発表論文集』7: 160-170.
北原保雄(編) (2010) 『明鏡国語辞典第 2 版』大修館書店。
国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店。
小松原哲太 (2016) 『レトリックと意味の創造性—言葉の逸脱と認知言語学』京都大学学術出版会。
篠原俊吾 (2019) 『選択の言語学—ことばのオートフォーカス—』開拓社。
篠原俊吾 (2008) 「形容詞を支える認知プロセス」『教養論叢』129: 13-122。
高橋圭介 (2016) 「文法的振る舞いに着目した多義的別義の認定」『人文論究』86: 1-10。
竹沢幸一 (2001) 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類—記述的考察を中心に—」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書』平成 12 年度 4(1): 237-264。
中村明 (1991) 『日本語レトリック体系』岩波書店。
仲本康一郎 (2006) 「属性の意味論と活動の文脈—椅子が荷物になるとき—」『日本語・日本文化』32: 39-61。
仲本康一郎 (2007) 「局面解釈とアスペクト現象—生態心理学の観点から—」『日本語・日本文化』33: 17-36。
西尾寅弥 (1972) 『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版。
早瀬尚子 (2018) 「言語表現の意味とその指示対象」早瀬尚子 (編) 『言語の認知とコミュニケーション—意味論・語用論, 認知言語学, 社会言語学—』29-44. 開拓社。
飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版。
松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 第 1 巻 (語・文と文法カテゴリーの意味)』23-43. ひつじ書房。
村上佳恵 (2017) 『感情形容詞の用法: 現代日本後における使用実態』笠間書院。
靱山洋介 (2012) 「多義語における統語的關係と多義的別義の關係」『名古屋大学日本語・日本文化論集』19: 67-87。
靱山洋介 (1995) 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味転用の一方向性: 空間から時間へ—」『東京大学言語学論集』14: 621-639。
靱山洋介 (1993) 「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐる—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1: 35-57。